

## ヘンリエッタ・ソルドのシオニズム観におけるヘブライ語の意義

大岩根 安里

同志社大学大学院神学研究科

### 要旨

1897年、テオドール・ヘルツルによって招集された第一回シオニスト会議に先立つ前年、ヘンリエッタ・ソルドは、初めて自らシオニストであるということを公言した。ロシア系ユダヤ人との出会いをきっかけに、彼女はユダヤ・アイデンティティの復興をシオニズムと結びつけた。1912年のハダッサ(Hadassah)設立以降、彼女は単なる学習としての場から実践的な場へとシオニズムを体現する場所を移した。それに伴い、彼女のスピーチや論文の中で、ヘブライ語に関する言及は表舞台から姿を消していく。しかし彼女の中で、ユダヤ人のアイデンティティを保持するうえで、パレスティナが重要であるという点に関しては、ハダッサ設立以前、以後を問わず変化しない。本論文では、ソルドにおけるヘブライ語の意義を問うことにより、彼女のシオニズム観の変遷とその根底に流れる普遍的な価値観を探ることを目的としている。

### キーワード

ユダヤ・アイデンティティ、ヘブライ語、シオニズム、ヘブル・リテラリー・ソサエティ、「ユダヤ教の知性と規律」

### はじめに

ヘンリエッタ・ソルド(Henrietta Szold, 1860-1945、以下ソルド)は、1912年にハダッサ—アメリカ・女性シオニスト機構(Hadassah-the Women's Zionist Organization of America、以下、ハダッサ)を設立したことで知られる人物である。ハダッサとは、イスラエル建国以前のパレスティナへ看護師を派遣し、現地の公衆衛生を整えるなど、実質的にパレスティナの生活向上に大きな貢献を果たした団体である<sup>1</sup>。またユダヤ人、アラブ人の区別なく医療を施すという精神が称えられ<sup>2</sup>、2005年にはノーベル平和賞にノミネートされている<sup>3</sup>。このようなハダッ

サの博愛精神のイメージと通じるように、ソルドは数あるシオニストの分類の中で、「平和主義シオニスト」(pacifist-Zionists)と呼ばれている<sup>4</sup>。ソルドに対して、ハダッサにまつわる偉業に関して繰り返し語り継がれている伝記がある一方で、彼女がシオニストとなっていった動機の背景に、ロシア系ユダヤ人との交流、およびヘブライ語との関わりがあったということに焦点を当てた先行研究は数少ない<sup>5</sup>。本稿の目的は、ソルドのスピーチや論文をもとに、彼女がヘブライ語を如何に使用し、受け止めていたかを探るものである。ソルドのシオニズム観は、彼女のヘブライ語観に反映されているものであることが本稿を通して明らかとなるだろう。Ⅰでは、ソルドの経歴および、彼女に最も影響を与えた人物である父親に関して論述している。Ⅱでは、ソルドのスピーチ、論文、日記、手紙を紹介し、彼女のシオニズム観の変遷を概観する。Ⅲでは、ソルドにとってのヘブライ語の意義を問うことにより、彼女のシオニズム観を明らかにしたい。

## Ⅰ ソルドの人物像

### 1. ラビである父親から受けた影響

ソルドは、ハンガリー系の両親のもと、ボルティモアで8人姉妹の長女として生を受けた。父、ラビ・ベンジャミン・ソルドは、礼拝時に男女が共に座れる家族席を設置するなど、改革に対して柔軟な姿勢を持つ人物であった<sup>6</sup>。ところがこのような改革の姿勢は、1870年代後半になると次第に弱まっていった。彼はシナゴグでいくつかの改革を行なったが、自らの宗教的アイデンティティを当時の改革派、正統派のいずれにも見出すことができなかつたようである<sup>7</sup>。ラビ・ソルドの改革に対する姿勢の変容の背景には、彼が「歴史学派」(“Historical School”)に属していたことがあったと考えられる。「歴史学派」とはラビや学者から構成されており、宗教の信条(原理)は、柔軟性のないドグマに基づくものではなく、伝統の発展とユダヤの民の慣習によって導かれるものである、という立場をとったグループである<sup>8</sup>。彼は、ユダヤの普遍的且つ倫理的な使命を重視するという「歴史学派」の立場に依拠していたため、ボルティモアの会衆が求める過剰な改革に同意できなかつた。またシオニズムに対して当初は反対の姿勢を表明していたが<sup>9</sup>、1880年代にアメリカに移住してきたロシア系ユダヤ人とのヘブル・リテラリー・ソサエティでの交流を通して、ソルドの父親はシオニズムを容認する姿勢へと変容していった<sup>10</sup>。このように、彼は宗教的立ち位置およびシオニズムに対する見解に対しても、当時のユダヤ教界の中で独自の立場を貫くこととなった。同様に、元来、女性にはトーラーの学習は義務付けられていないにもかかわらず、父は娘のソルドにユダヤ教の学習を施した。彼女は幼少時より、トーラーやタルムード、さらにユダヤ人の歴史、文学について学んでいる<sup>11</sup>。このよ

うな父の姿勢は彼女のユダヤ教理解やシオニズム理解へと影響を与えるものとなる。実際、ソルドも上述のヘブル・リテラリー・ソサエティとの交流を契機に自らをシオニストであると認識し始めている<sup>12</sup>。

## 2. 経歴

1888年、ソルドが28歳の時、ユダヤ出版協会(Jewish Publication Society of America、以下JPS)が設立され、彼女は編集部の一員に加わるようになった。翌年の秋には、ロシア夜間学校(Russian Night School)で、移民がアメリカの生活にいち早く馴染むよう、またより良い生活を営めるように英語や洋裁、簿記を教えることになる。1893年、彼女はそれまで勤めていたthe Misses Adams's Schoolを辞職し、ロシア夜間学校の管理職も退き、JPSで本格的に働き始め、編集、翻訳、校訂など多岐にわたる職務をこなすようになった<sup>13</sup>。さらに翌年には、ボルティモアのシオニスト協会へと参加するようになる。

1907年、シオニストの著作の講読や昨今のユダヤ問題を議論する場として機能していた「ハダッサ学習会」に参加する。1909年、パレスティナへの訪問を機に、パレスティナでの実践的な活動をシオニズム活動の範疇に入れることになる。1912年に複数のユダヤ人女性らと共に、「ハダッサ」を立ち上げ、議長に選出される。その後、1917年には、ルイス・ブランダイスの提案により、ハダッサの事業の一環として、「アメリカ・シオニスト医療団」(the American Zionist Medical Unit、以下AZMU)の任務を引き受ける。1920年、60歳の時に、AZMUの監督責任者としてパレスティナへ渡った後、1927年から三年間、世界シオニスト機構のパレスティナ執行部の健康局と教育局の大臣に任命される。1933年には、ナチス政権下のユダヤ人の子どもを救出する運動、「青年アリヤー」の事業を引き受ける。ソルドは実践的なシオニストとなった当初からパレスティナに移住する気はなかったが、最晩年に「青年アリヤー」の事業を引き受けたことから、結果的にはエルサレムで生涯を終えることになった<sup>14</sup>。

## II テキストからみるソルドのシオニズム観

### 1. “A Century of Jewish Thought”(1896年)

アロン・ガルは、ソルドのシオニズム観は彼女のユダヤ教理解に根ざしたものであったとみなし、それゆえ、ヘルツルのような政治的シオニズムとは徹底して区別する必要があると述べている<sup>15</sup>。以下にあげるスピーチは、1896年1月26日に全国ユダヤ人女性協議会(the National Council of Jewish Women, NCJW)のボルティモア支部主催による、モーゼス・メンデルスゾーンの没後100年を記念した催しで語られたものである。“A Century of Jewish Thought”と題したスピーチの中

で、ソルドはヘブライ語の歴史的役割について述べている。このスピーチは、ソルドのユダヤ教理解と彼女が捉えたシオニズムとの関係性がよくわかるものである。

この新しい言語[ヘブライ語]は、パレスティナへの入植という実際的な必要性から、また[……]同時代の科学の専門用語や哲学書を翻訳する必要性のなかで創出されました。[……]パレスティナの地において、ユダヤ人の入植地やユダヤ人の町の学校で必要となる地理や歴史、芸術その他の分野の教科書がヘブライ語で編纂されています。[……私たちには……]祖先が経験した約束の地の喪失という代償のうえに、広大で富んだ[文学があり、]私たちは、前の世代がそうしてきたように、文学に向けられた建設的な批判に惹きつけられているのです。それゆえ批判はユダヤの生活そのものであり、知的に対応した各々の時代と同様に、私たちの時代も聖書に立ち戻っているのです<sup>16</sup>。

さらにソルドはヘブライ語の復興が三つの時代に興隆したと主張し、その時代を以下のように区分している<sup>17</sup>。一つ目は、8世紀、東西においてユダヤとイスラームが密接に関わった時代である。当時、新たに獲得した言語学上の原則を聖典に適用させ、聖書の豊富な研究をもとに哲学思想ならびに詩的創作が形成された時代として位置付けている。二番目の時代は、「メンデルスゾーンの時代」とし、この時代のヘブライ語の復興の動きとしては、聖書の翻訳、聖なる言語という機能のみにその役割を果たしていたヘブライ語を再び散文として扱おうと試みた詩人が登場した時代であり、且つ聖書のドイツ語への翻訳によってユダヤ人の自尊心が育成された時代として定義している。三つ目の時代は、「現代」であると主張する。ソルドは、エリエゼル・ベン・イエフダーのヘブライ語復興運動を第三のヘブライ語復興期であると位置付け、解釈を行なっている。彼女は、ユダヤ研究はヘブライ語の復興に付随して生じていると考えた。そのため三つに区分した各々の時代は、ユダヤ研究再生の時期でもあると捉えられる。彼女にとって民族的な運動、あるいはシオニズム運動は、ヘブライ語復興の中に組み込まれることになる。つまり、ソルドはユダヤ・アイデンティティを保持するために発生してきたヘブライ語の復活を、彼女と同時代に生きたベン・イエフダーによるヘブライ語復興運動と結び付け、さらに雑誌の作成、文学の産出、グループの結成、その他、ヘブライ語を普及しようとするユダヤ人のあらゆる活動を「シオニズム」運動の範疇に当てはめて解釈している<sup>18</sup>。ソルドは今日の世界において、正統派、改革派のみならず、あらゆるユダヤ教が生じている状況のなか、ヘブライ語によってユダヤ教は一つである／一つになることが可能であると主張した<sup>19</sup>。彼女は自

らシオニストであると主張していたが、すべてのユダヤ人がパレスティナに帰還することを唱えたわけではなかった。そのことは、以下の彼女の言葉によく表れている。

私はパレスティナに帰還することを言っているわけではありません。[...]パレスティナはユダヤ人の約束、古代の占領、族長、預言者、詩篇の作者、血統の美德、追憶によって、中心地として最も適した場所なのです。このことはパレスティナ自体が示しています[...]<sup>20</sup>。

ソルドの関心事は、ユダヤ人たちのアイデンティティの危機的状況であった。この状況を救うものとして、ヘブライ語の復興が取り上げられている。彼女はメンデルスゾーン、さらにそれ以前にまで遡り、ヘブライ語の復興とシオニズムのイデオロギーとの関連を示そうとした<sup>21</sup>。彼女は多様化したユダヤ教の状況に対し、ヘブライ語が一つの「ユダヤ」として繋ぎとめる役割を果たすことができると考えた。またスピーチの内容から、ソルドはパレスティナに帰還することをシオニズムの目的として掲げていなかったことが明らかとなった。あくまでもパレスティナの地は、ユダヤ人のアイデンティティを保持するために重要である、というものであった。このようなソルドのシオニズム観は、ガルが指摘するように、*the Maccabean* (1901年)に掲載された彼女自身の論文の中で、さらに発展していくことになる<sup>22</sup>。

## 2. “The Internal Jewish Question” (1901年)

この論文では、彼女のシオニズムとユダヤ教理解との関係がより強固に結び付けられている。

シオニズムは機知に富み、力強い。シオニズムは、排他的な規範であり且つ最終的なユダヤ人国家としてのタルムード主義を受け入れはしない。[...]シオニズムは、ユダヤ人によってユダヤ的な生活を営むことを提案している。ユダヤ教は、複雑で発展するシステムであるため、シオニズムがユダヤ的な生活の実践をもたらすものであると信じている<sup>23</sup>。

この「ユダヤ教は複雑で発展するシステムである」という解釈は、父親の属していた「歴史学派」の主張と共鳴するものである。「タルムード主義」とは、ソルドの言葉で述べるならば、「ユダヤ人が世界を遍歴している期間、ユダヤ人のために『持ち運べる形態』[律法]として、タルムードの教えが導入された。タル

ムード主義は、多様なユダヤ教の生活を集約したに過ぎない」とされる<sup>24</sup>。つまりユダヤ人の歴史の過程で、タルムードというものが生み出されたわけであるが、ソルドはユダヤ教を保持する一つの形態として生み出されたタルムードに固執することを、「タルムード主義」と呼び、それに対して批判している。このような彼女の批判の背景にも、「ユダヤの律法の発展」という考え方が反映されているのがわかる。ユダヤ教の律法は時代の状況によって変化していくものであるという理解である。彼女はこの論文の中で、「もしシオニズムが真に崇高な精神に基づいているなら、シオニズム運動は実体となり得るだろう」と述べている<sup>25</sup>。ここでは「真に崇高な精神」というものが、どのようなものであるか具体的に明らかにされてはいないが、少なくとも、この時点では、条件を課しているとはいえ、シオニズムを肯定的に捉えていることがわかる。それは、以下の手紙の内容からも明らかとなる。

### 3. 1918 年の手紙

1918 年から 20 年までアメリカ・シオニスト機構 (Zionist Organization of America, ZOA) の教育部長を務めたソルドは、この頃、友人ローズ・ジェイコブス (Rose Jacobs) 宛てに次のような手紙を送っている。

[...]ユダヤ教の高い知性と精神的な規律をシオニズムの中に入れて考えた場合、実際[パレスティナの現状でそれを実行することは]あまりにも困難です[...]<sup>26</sup>。

このように、ソルドはユダヤ教の知性と規律をパレスティナへもたらすものとしてシオニズムを捉えていたことがわかる。

### 4. 1937 年の日記

1918 年の手紙でも、ソルドが自らのシオニズム観を体現することの困難さを露わにしているが、その色調は 1930 年代になるとより顕著になる。

[...]今、私が思うこと。[それは]私たちはアラブ・ユダヤ人問題 (the Arab-Jewish problem) の解決のための共感的な挑戦を新たに五年間持つべきでしょう。私は解決があると信じています。もし私たちがその解決を見つけられなければ、そのとき私は、シオニズムは完全に失敗したと考えます<sup>27</sup>。

1937 年のパレスティナは、前年の 4 月に始まったアラブ人による暴動のため

混乱していた<sup>28</sup>。暴動の状況を報告するためイギリス政府はパレスティナに調査団を送り、その報告書(ピール報告書)が出されたのは1937年7月のことであった。彼女はこのような状況の中、8月27日に上述の日記を記していた。

彼女は、1945年2月13日に亡くなったため、建国後(1948年)以降のイスラエルを知ることはなかった。晩年、彼女がイシューヴにいる人々に向けて語った言葉に次のようなものがある。「私をシオニズムへと駆り立てたのはユダヤ教であった。けれども私は宗教(Religion)としてユダヤ教を理解しているわけではなく、私たちの道徳的な指針(moral code)として信じているのである。[道徳的指針としての]ユダヤ教はこの地でアラブ人との共存の道を見出すことを命じている」<sup>29</sup>。このことから、彼女のシオニズム観はあくまでも道徳的指針としてのユダヤ教に根ざしたものであったといえる。「律法を現代的に順応させていくこと」と「ユダヤ教は生活の指針である」といった父親のユダヤ教理解は、彼女のシオニズム活動への動機の基盤となっていた。彼女を「平和主義シオニスト」と呼ぶ者もいるが、彼女自身は「博愛主義者」と呼ばれることを好まなかった<sup>30</sup>。宗教や人種を問わず、医療サービスを提供するというハダッサの姿勢は、ソルドの見解によると、博愛主義および慈善の精神から由来するものではなく、あくまでもユダヤ教の高い知性と規律に基づいたシオニズム観に依拠するべきものであった。晩年にかけて、パレスティナの政治状況が厳しくなるなか、ソルドのシオニズムに対する認識は次第に変化していく。それは、ソルドがシオニズムに描いた理想の実現を、困難な状況のために、もはや断念していると捉えることができるかもしれない。しかし、一貫して変わらない点は彼女がシオニズムにユダヤ教の崇高な精神の実現を見出していた点にあるといえるだろう。

### Ⅲ ソルドにとってのヘブライ語

ソルドはパレスティナに渡ってから二年が過ぎた頃、「私にとってヘブライ語を話すことは、たやすいことではない」という内容の手紙を書き記している<sup>31</sup>。彼女は、ヘブライ語の復興とユダヤ・アイデンティティの結びつきを強く主張したけれども、ヘブライ語での日常会話は困難であったようである。

パレスティナでのソルドのヘブライ語事情として、以下のエピソードがある。それは、イスラエル建国前夜のイシューヴでは、ナショナリズム的な「ヘブライ語のみ!」(raq 'ib'rit![Only Hebrew!])というスローガンが蔓延していたことに対して、ソルドは嫌悪感を抱いていたということである<sup>32</sup>。彼女の「一つのものに固定しないユダヤ教理解」およびそのユダヤ教理解に基づくシオニズム観においては、このイシューヴの熱狂的な雰囲気を受け入れることができなかったのだろう。またローヴェンタールによると、当時、若い世代の入植者の間で「キブーシュ」

(kibûš)というヘブライ語が新しい標語として広まっていたが、彼女は手紙などでこの言葉を使用することを避けていたという<sup>33</sup>。「キブーシュ」という用語は、「征服(すること)」「(to subdue)」という意味で、ヨシユアの時代に、イスラエルの軍団によって「土地が征服された」時の記述に用いられている用語である。当時パレスティナにいた若い入植者によって、敵や武器は異なるものの、ヨシユアの時代の状況と彼らの時代の状況が類似していると解釈されたことから、この用語が使用されていたという<sup>34</sup>。ソルドはこの用語の使用を回避していた、とあることから、彼女自身は「征服」することを目的としてはいなかったことを読み取ることができるだろう。意図的に政治的戦略からこの用語の使用を避けたと解釈することもできるが、先行研究ではそのような読み方はなされていない<sup>35</sup>。

## おわりに

前述のヘブル・リテラリー・ソサエティは、移民のために英語の講座を設けただけでなく、ヘブライ語で聖書を学習するクラスの設置を行なった<sup>36</sup>。さらにヘブライ語文献の図書館を設立するなどといった活動を通して、ボルティモアのユダヤ人に対してユダヤ・アイデンティティの形成／再確認の場として機能した。同ソサエティの紹介で、1894年に設立されたシオニスト協会にソルドは父親と共に参加するようになった。この頃の彼女のスピーチ(1896年)の中では、ヘブライ語がユダヤ・アイデンティティに果たす重要な要素であるということが強く打ち出されたものとなっている。これは同ソサエティの影響があったと考えられる。しかし、ヘブライ語そのものへの言及は本稿Ⅱで取り上げたように、彼女の論文や日記の中から次第に語られることがなくなっていく。つまり、パレスティナ訪問(1909年)以前のソルドのシオニズム活動は、ユダヤ・アイデンティティを培う学習の場としてのみ機能しており、ハダッサ設立後は、より実践的にパレスティナの人々の生活向上のために活動するようになった。その結果、ヘブライ語への言及が見られなくなったと解釈することもできるだろう。だが、ソルドのヘブライ語を重要だと捉える傾向は、形を変えてハダッサのパンフレットの中で登場している。ソルドは、パレスティナからアメリカの会員に向けて発行していたパンフレットの追伸欄に、「ヘブライ語を学習すること！話せるようになりましょう！」という項目を設けていた<sup>37</sup>。ヘブライ語は、彼女にとってハダッサ設立以後も、ユダヤ・アイデンティティを繋ぎとめる媒体として理解されていたのではないだろうか。

一見すると、初期のソルドのシオニズム観は、「文化的シオニズム」の主導者とされるアハッド・ハアムのシオニズム観に共鳴しているように受け取ることができるかもしれない。1896年のソルドのスピーチの中で述べられている内容は、



パレスティナがユダヤ教の伝統と文化遺産を次世代に継承するのに最も適した場所とみなす主張であった。これは、アハッド・ハアムの「パレスティナのみが古代のユダヤ人の文化が発達した土地」である故に、ユダヤ・アイデンティティの中心地としてパレスティナが最も適している、という主張に影響を受けたものであると考えられるかもしれない<sup>38</sup>。確かに、ソルドは1903年にニューヨークのユダヤ教神学校(Jewish Theological Seminary in New York)でタルムードの講義を受講していた時、教授陣の中にいたイスラエル・フリードレンダー(Israel Friedlaender)と交流があった。彼はアハッド・ハアムの熱心な弟子(an avid disciple)の一人であった。しかし、ソルド自身の言葉で直接アハッド・ハアムから影響を受けているということは語られていない。そのため先行研究者も、ソルドがアハッド・ハアムの影響を受けていたかどうかについては慎重に判断している<sup>39</sup>。ガルやローヴェンタールが指摘しているように、ソルドのシオニズム観はアハッド・ハアムのものと非常に接近したものであったが、同じ観念を共有していたと位置付けることはできない。

ハダッサのパンフレットから明らかになったように、ソルドにとってヘブライ語の重要性は失われてはいなかったが、当時のイシューヴ界で熱狂的且つイデオロギー化したヘブライ語の使用に対しては一定の距離を保っていた。彼女のこうしたヘブライ語観の根底には、「ユダヤ教の高い知性と精神的な規律」をもたらすものとして、シオニズムを実践するという、彼女独自のシオニズム観が反映されていたといえるだろう。

## 註

- <sup>1</sup> ハダッサの本格的な研究として以下の数点があげられる。Erica B. Simmons, *Hadassah and the Zionist Project* (Rowman & Littlefield Publishers, 2006); Mira Katzburg-Yungman, “Women and Zionist Activity in Eretz Israel: The case of Hadassah, 1913-1958,” in Shulamit Reinharz and Mark A. Raider, eds., *American Jewish Women and the Zionist Enterprise* (Brandeis University Press, 2005); Mira Katzburg-Yungman, *American Women Zionist: Hadassah and the Rebirth of Israel* (The Ben-Gurion Research Institute, 2008)[in Hebrew].
- <sup>2</sup> ハダッサの医療活動は、リリアン・ウォルドのヘンリー・ストリート・ハウスの精神に倣ったものとして考えられている。Allon Gal, “The Zionist Vision of Henrietta Szold,” in Shulamit Reinharz and Mark A. Raider eds., *American Jewish Women and the Zionist Enterprise* (Brandeis University Press, 2005), p. 39; Nathan Ausubel, *Pictorial History of the Jewish People: From Bible Times to Our Own Day Throughout the World* (Crown Publishers, Inc., 1954 [1953]), p. 329.
- <sup>3</sup> なお現在のハダッサの正式名称は、ハダッサ医療機構(Hadassah Medical Organization)であ

- 
- る。Erica Simmons, “Hadassah,” *Encyclopaedia Judaica*, Second Edition, vol. 8 (Keter Publishing House, 2007), p. 188.
- <sup>4</sup> 各々のシオニストの特徴を掴み、あえて分類する場合、例えばテオドール・ヘルツルは「政治的シオニスト」として分類されることが定着している。例えば以下を参照。Shlomo Avineri, *The Making of Modern Zionism: The Intellectual Origins of the Jewish State* (Basic Books, 1981), pp.88-100. Medoffによると、「平和主義シオニスト」の分類には、ソルドの他にユダ・マグネスが含まれている。1920年代から30年代にかけて、イシューヴの人々の生活向上のために尽力したが、イシューヴ内での政治的覇権には関心を持たなかったシオニストを指すものとして用いられている。Rafael Medoff, *Zionism and the Arabs: an American Jewish Dilemma, 1898-1948* (Praeger, 1997), p. 35.
- <sup>5</sup> 例えば、Eric L. Goldstein, “The Practical as Spiritual: Henrietta Szold’s American Zionist Ideology, 1878-1920,” in: Barry Kessler (Editor and Curator) *Daughter of Zion: Henrietta Szold and American Jewish Womanhood* (Jewish Historical Society of Maryland, 1995), pp. 17-33.
- <sup>6</sup> ラビ・ソルドは、今日知られているような「保守派」の草分け的な存在であったとみなされる場合がある。Mark Lee Raphael, *Profiles in American Judaism: The Reform, Conservative, Orthodox, and Reconstructionist Traditions in Historical Perspective* (Harper & Row, 1984), p. 83 ; Edward Wagenknecht, *Daughters of the Covenant Portraits of Six Jewish Women* (the University of Massachusetts Press, 1983), p. 152.
- <sup>7</sup> 彼はイサク・マイヤー・ワイズ(Isaac Mayer Wise)宛てに、「[...]私も、あなたのように[新しい]改革には反対です。…私は二つ[正統派や改革派]に反対ですし、同時にそのどちらでもありません」という手紙を送っている。Raphael, op. cit., p. 82.
- <sup>8</sup> Goldstein, op. cit., pp. 17-18.
- <sup>9</sup> 彼はボグロム以前の1870年代にシオニズムの思想を拒絶する論文を記している。Joan Dash, *Summoned to Jerusalem: The Life of Henrietta Szold* (Wipf and Stock Publishers, 2003 [1979]), p. 22.
- <sup>10</sup> ヘブル・リテラリー・ソサエティとは、ボルティモアにおける東欧系移民の文化活動を促進させる目的で、ロシア系移民の若手研究者、アレキサンダー・ハーカヴィ(Alexander Harkavy)とダビッド・ヴァッサーツグ(David Wasserzug)が中心となり組織されたものである。同ソサエティは、1823年に記されたイツハク・バール・レヴィンゾーン(Reb Itzhak Baer Levinsohn)の著作『イスラエルでの使命』(*Te'udah be-Yisrael*, “A Mission in Israel”)の内容を実行しようと試みた。彼の主張は近代化された生活を営みながら、同時にユダヤ教の文化的遺産や宗教的な環境を放棄させない教育を目指すところにある。同ソサエティではその教育理念に基づき、移民たちのアメリカ社会への進出を促すことと、近代に適応したユダヤ教の学問、文化を教える教育を模索した。Goldstein, op. cit., p. 19. レヴィンゾーンの著作のヘブライ文字の転写は、以下の慣例に従っている。なお同書物は、正統派による反対のため、1828年まで公にならなかった。Yehuda Slutsky, “Levinsohn, Isaac Baer,” *Encyclopaedia Judaica*, Second Edition, vol. 12 (Keter Publishing House, 2007), p. 720-722. ジュダイカでは、英訳は「“Testimony in Israel”」となっている。

- 
- <sup>11</sup> Wagenknecht, op. cit., p. 152.
- <sup>12</sup> 本稿「おわりに」を参照。
- <sup>13</sup> 彼女が携わった代表的な作品は以下の通り。ハインリッヒ・グレーツ (Heinrich Graetz) の *History of the Jews* の翻訳の校訂作業、英語訳の索引(第六巻)を編集した。さらにルイス・ギンツベルク (Louis Ginzberg) の *The Legends of the Jews* の第一、二巻、ナフーム・スロウシュ (Nahum Slousch) の *The Renascence of Hebrew Literature* の翻訳など。詳しくは以下、参照。Jonathan D. Sarna, *JPS: The Americanization of Jewish Culture* (The Jewish Publication Society, 1989), pp. 386-411.
- <sup>14</sup> ソルドは、晩年まで自分の生まれ育ったボルティモアへの郷愁を捨てることはなく、アメリカに戻りたいと願っていた。しかし、アメリカをユダヤ・アイデンティティの繁栄の地として見出すことはしなかった。彼女にとってユダヤ・アイデンティティを保持する中心地はパレスティナであった。Gal, “The Zionist Vision of Henrietta Szold,” pp. 25-26; Dash, *Summoned to Jerusalem*, p. 225; Michael Brown, “Henrietta Szold’s Progressive American Vision of the Yishuv,” in: Allon Gal ed., *Envisioning Israel: The Changing Ideals and Images of North American Jews* (The Magnes Press, 1996), p. 80.
- <sup>15</sup> Gal, op. cit.. ガルは、ヨーロッパで発生した政治的シオニズムを長い捕囚 (*galut*) の状態で発展してきた伝統的なユダヤ教とユダヤの価値に対する反乱であるとみなし、政治的シオニズムはその反乱を普及させようとしたものであると定義している。ヘルツルは、「ウガンダ案」を受け入れていたことに見られるように、ユダヤ人にとって安全な地を確保するためには、パレスティナに固執していたわけではなかった。ヘルツルにとってシオニズムの最重要目的が、難民化したユダヤ人の避難所を確保するという点であったのに対し、ソルドは難民化したユダヤ人のパレスティナでの生活向上のために実践的な活動家となったが、ユダヤの文化的遺産、すなわちユダヤ・アイデンティティの保持という点ではパレスティナに固辞している点で、ヘルツルとは異なっていた。
- <sup>16</sup> Henrietta Szold, “A Century of Jewish Thought,” p. 2. Hagshama — Department of the World Zionist Organization (<http://www.hagshama.org/en/resources/print.asp?id=1621>) (2009/09/25 取得)
- <sup>17</sup> *Ibid.*, p. 3.
- <sup>18</sup> このように考える背景には次のようなヘブライ語理解がある。それはヘブライ語という言葉それ自体には翻訳不可能な「ヘブライの観念」が内包されており、その結果、著作内容自体がユダヤ教に賛成か反対かに関係なく、ヘブライ語で記されたものはすべて「ユダヤの土壌の産物」であるという考え方である。 *Ibid.*, p. 5.
- <sup>19</sup> *Ibid.*, p. 6.
- <sup>20</sup> *Ibid.*, p. 5.
- <sup>21</sup> Gal, op. cit., p. 26.
- <sup>22</sup> *Ibid.*: またガルは別の論文で、ユダヤ教とシオニズムを関連付けたものとしてソルドの同論文を紹介している。Allon Gal, “The Motif of Historical Continuity in American Zionist Ideology, 1900-1950,” *Studies in Zionism*, vol. 13, no.1 (1992), p. 7.
- <sup>23</sup> Henrietta Szold, “The Internal Jewish Question: National Dissolution or continued Existence,” *The*

- 
- Maccabaeen* 1, no. 2 (November, 1901), p. 58. ソルドは 1896 年のスピーチの中でも、ユダヤ教の発展に関して同様のことを述べている。H. Szold, “A Century of Jewish Thought,” p. 4.
- <sup>24</sup> H. Szold, “The Internal Jewish Question,” pp. 59-61.
- <sup>25</sup> *Ibid.*, p. 61.
- <sup>26</sup> Marvin Lowenthal, *Henrietta Szold: Life and Letters* (Greenwood Press, 1975 [1942]), p. 101.
- <sup>27</sup> *Ibid.*, p. 321.
- <sup>28</sup> マルティン・ブーバー 『ひとつの土地にふたつの民』、みすず書房、2006 年、109-110 頁。
- <sup>29</sup> M. Buber, J. Magnes, and E. Simmon, eds., *Towards Union in Palestine: Essays on Zionism and Jewish-Arab Cooperation* (Ihud [Union] Association, 1947). ページ番号不明。この冊子はソルドに献呈されたものである。この中に、ソルドが 1942 年に語ったスピーチが掲載されている。
- <sup>30</sup> ハダッサが組織を拡大するために非シオニストの女性を勧誘することを視野に入れるようになった当初、ソルドはハダッサの組織がシオニズム的な性格を失うことに対しては警戒するべきであると主張していた。「私はあなたたちに非シオニストの傾向について[影響されないように]警告します。[...]私たちはシオニスト色を主張しない限り、結果的にしまりのない博愛主義者になり兼ねません」と警戒していた。Baïla Round Shargel, *Lost Love: The Untold Story of Henrietta Szold* (Jewish Publication Society, 1997), p. 328. *Quoted.*, Szold to Mrs. Brodie, 10 April 1913, Jewish Historical Society of Maryland (Henrietta Papers), Baltimore, MD (JHSM), Box1, f 29.
- <sup>31</sup> Joan Dash, “Doing Good in Palestine: Magnes and Henrietta Szold,” William M. Brinner and Moses Rischin eds., *Like All the Nations?: The Life and Legacy of Judah L. Magnes* (State University of New York Press, 1987), pp. 99-111.
- <sup>32</sup> Gal, “The Zionist Vision of Henrietta Szold,” pp. 34-35.
- <sup>33</sup> ローヴェンタールは、「ケブーシュ」(*kebush*)と記しているが、これは「キブーシュ」(*kibush*)の誤りであると考えられる。ちなみにガルも、ローヴェンタールの研究に言及しているが、ガルの論文では「キブーシュ」(*kibush*)と記述し、ローヴェンタールの誤りを訂正している。Lowenthal, *Henrietta Szold*, p. 145; Gal, *Ibid.*, pp. 41-42, n. 37. なお本文のヘブライ文字の転写法は、『旧約新約聖書大事典』(教文館)に従っている。
- <sup>34</sup> Lowenthal, *Ibid.*.
- <sup>35</sup> ローヴェンタールやガルはそのような見方をしていない。
- <sup>36</sup> 同ソサエティの成立年は定かではない。1885 年設立説もあるが本稿ではソルドの説に従い、1887 年から翌年にかけて設立されたものとして考える。Henrietta Szold, “Early Zionist Days in Baltimore,” *The Maccabaeen* 30 (June-July, 1917), p. 265. および本稿註 10 参照。
- <sup>37</sup> Henrietta Szold, *Familiar Letters from Palestine* (Jerusalem, January 13, 1921.), Central Zionist Archives (Jerusalem), File A125/23.
- <sup>38</sup> サイモン・ノベック 『二十世紀のユダヤ思想家』、ミルトス、1996 年、60-61 頁。
- <sup>39</sup> Gal, “The Zionist Vision of Henrietta Szold,” p. 35; Lowenthal, *op. cit.*, p. 54.

## Henrietta Szold's concept of Zionism and the place of Hebrew in it

Anri Oiwane

Graduate School of Theology, Doshisha University

### **Abstract :**

In the year prior to the first Zionist congress, held by Theodor Herzl in 1897, Henrietta Szold proclaimed for the first "I am a Zionist." After encountering Russian Jews, she connected Zionism with the renaissance of the Jewish identity. Since the establishment of Hadassah in 1912, Szold went from thinking about Zionism as purely the subject of study to something to be practiced, and in line with this, she stopped mentioning the Hebrew language in her speeches and papers. However, her idea that Palestine was important to maintain Jewish identity had not changed before or after the establishment of Hadassah. This paper focuses on Szold's concept of Zionism by looking at the role of Hebrew in it, and the transition of her view of the universal value of Zionism.

**Keywords :** Jewish Identity, Hebrew, Zionism, the Hebrew Literary Society, "Jewish intellectual heritage and discipline"